

AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD
 国際耕種株式会社
 〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403
 TEL/FAX: 042-725-6250 Email: aai@sk9.so-net.ne.jp

メコンのほとりで：私のベトナム（それにしても、ベトナム料理のうまかったこと！）

ベトナムに1ヶ月間出張する機会がありました。滞在期間も短かったし、ほとんどホーチミン市にいたのでベトナム全体の話というより、ベトナムで考えたことです。まず、一番最初にホーチミンで驚いたことは、バイクが多い、とにかく多いこと！ 歩いている人はあまり見かけない、たいていはバイクが自転車（もちろん金持ちは自動車）に乗っている。道を歩いていると必ずバイク・タクシーが「乗らないか」と声をかけてくる。新品のバイクの値段は日本円にして20万円もするそうで、なぜ月給が2,000~20,000円ぐらいしかない（能力・職種によって給料はかなり異なる）のに、多くの人がバイクを買えるのか、というのは不思議ですが.....ただ、みんなより良い就職（給料）をめざして努力しているようで、仕事が終わった後に（あるいは勤務時間中に！）語学学校やコンピュータの学校に通っている。

このバイクの群れを見ていると、ベトナムのエネルギーを感じる。でも、みんなどこへ向かっているのだろうか？ どこまで行くのだろうか？ ベトナムではみんなが一生懸命生きているように見える。それは今の日本人がすでに忘れてしまったものかもしれない。しかし、その先にあるものは..... 地球温暖化会議でも議論されていたように、我々（日本及び他の先進国）はここまで来てしまった。だからといって、まだそこまで到達していない途上国の人々に対して、経済発展は地球環境のためによくないからやめろ、とは言えない。それは到達してしまったからこそ言えることで、到達していない人々にはとっては、やはり未知の領域であり、憧れの対象でもある。

ベトナムでは、「日本の過去の公害経験に学ぶ」という内容の本がベトナム語で出版されていた。途上国の中にもこのように、先進国に学びつつ環境保全と経済発展の両方をバランスよく目指そう、という意識はある。そういう動きに対して、到達してしまった日本だからこそ、今こそ過去の反省の上に立って他の国の人々のモデルになるようなもの、地球環境保全に一層配慮し、かつ多くの人々が実現可能な現実的な選択肢を日本が示せるはずだし、示すべき時である。自然を切りきざみ、農業を切り捨て、ひたすら工業化や経済的発展をしてきた日本であるが、これからは農家以外の人々も自然や農業をより身近なものに取り戻していく「農的生活」が一つの重要なキーワードになるように思う。

しかし、日本人はここまで来てしまって、ライフスタイルを変えられるのだろうか？ ホテルで時々ある、部屋に入った時にキーを所定の場所に入れると電源が入る、部屋を出るときにキーを取ると電源が切れてしまうシステム、部屋が空の時にエアコンや電灯をつけっぱなしにしようと思ってもできないような（人間のモラルや倫理観だけに頼らない）システムづくりも必要であろう。（ホーチミンにて・湖東）



バイク、バイク、バイク、.....



メコンデルタの「足」はボート

第3回：国際協力事業団による水産養殖及び沙漠緑化に関わる技術協力

1980年からアラブ首長国連邦農業省に対して、水産技術開発センターにおける養殖技術の開発・普及に係る技術協力が実施され、現在に至っている。本プロジェクトは、現地主義に貫かれており、出稼ぎ外国人が多い湾岸産油国の特殊事情にもかかわらず、日本人専門家のカウンターパートはほとんどが UAE 国籍者である。また、魚やエビを対象とした日本の養殖技術をそのまま現地に移転するのではなく、現地の条件に合った技術を生み出すことに力を注いできた。さらに、養殖技術だけでなく、併設されている水族館では周辺の海域に生息する海洋生物を展示し、子供達の環境教育の一端を担っている。その他に、灌漑用水槽の清掃と養魚を目的として、テラピアの稚魚を農家に配布するといった活動も実施されている。このように活動は広範囲に及んでおり、最近では水産養殖とマングローブ植林を合体させて、沙漠沿岸部における生態系の創出を目指した活動も開始されている。初期のカウンターパートは、すでにセンターの所長や本省の水産局局長に昇格していて、強力なバックアップとなっている。本プロジェクトは、養殖を通じて UAE の人づくり、国づくりに大きな貢献を果たしており、湾岸地域における極めて理想的な技術協力であると考えられる。

1985年からは、静岡大学農学部とアラブ首長国連邦大学農学部による沙漠緑化（乾燥地農業）に関する共同研究が始まった。ここでは、砂丘の固定並びに節水・塩水灌漑下における作物生産の向上、及び耐塩性・耐乾性植物の研究等を目的とした試験研究が実施され、多くの成果が得られている。連邦唯一の大学という教育機関での技術協力であるので、JICA の目的とする人づくりという面で大きな成果が期待できるはずである。しかしながら、カウンターパートの多くが雇われ外国人で、契約期間が過ぎるとそれぞれの母国に帰国してしまうという産油国の特殊性が、協力の効率的な実施や持続的な展開の障害になっているように思われる。

UAE の隣国オマーンでは、1992年にオマニゼーション計画が導入された。これは、実務レベルでオマーン人を外国人労働者に代わって起用するのが目的である。いずれの産油国も将来のことを考えれば、こうした方向性が必要となって来よう。このような動きを側面からサポートできるような技術協力が、今後の産油国にとって望ましいのではなからうか。

水産養殖に係る技術協力

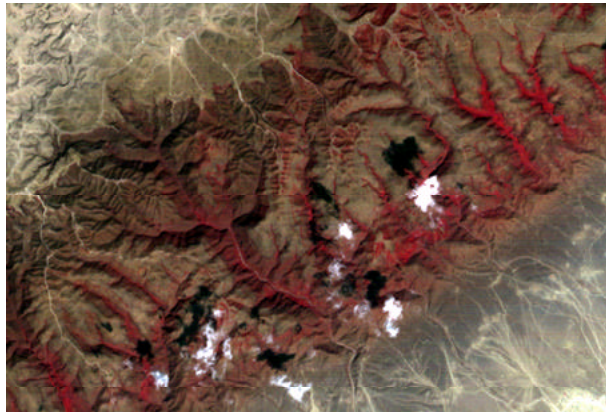


乾燥地農業に係る技術協力



第3回：ジャバル（山岳）地域の牧畜

サラールからすぐ北のジャバルと呼ばれている山岳地帯では、昔から放牧による家畜飼育が盛んである。ドファール州のジャバルのうちモンスーンの影響でかなりの自然植生が見られるのは、およそ南北 20km 弱、東西 80km 程度で、この地域で放牧が行われている。家畜の中心は食肉用及びミルク生産用の牛で、ほとんどの農家で飼育している。また、3割の農家でラクダ、2割の農家でヤギを飼育している。このうち牛が特に重要で、家長の手により大切に飼育され、餌も牧草、配合飼料、干し魚などが与えられ、自分の子供以上に大切にされている、ともいわれている。一方、家畜としての重要性が薄れつつあるラクダの飼育も家長の仕事ではあるが、その仕量は牛と比べて少なく、餌は放牧での不足分を与える程度である。食肉、ミルク用としてのヤギの飼育は主に子供と女の仕事で、ほとんど放牧により飼育されている。各農家は畜舎と母屋を兼ねた家に住み、家の回りに柵で囲んだ家畜用保護地を持っており、子牛などを入れている。



ジャバルの衛星写真 (1994年11月):
濃い赤は天然林、薄い赤は草原状の地域

これらの家畜は主に山岳の自然植生を基本にした放牧が行われてきたが、餌が不足する時期には近隣地域（主に放牧地を中心として南北に移動）へ餌を求め、家畜を移動させている。現在では人間が与える飼料の増加から、この伝統的放牧も薄れてきたと言われているが、それでも緑の多くなるモンスーン時期のサラール市近郊では多くの家畜（特にラクダ）が山から下りてきているのを見る。牧畜以外の農産物では、乳香、蜂蜜が有名で非常に高価である。モンスーンの時期にはローカルのキュウリ、キノコなどが市場に出てくる。また、農産物ではないが牛糞を堆肥化したコンポストも重要な収入源である。（乳香については AAINews 第2号参照）。

1994年の資料によると、家畜数は牛が8,400頭、ラクダが2,000頭、ヤギが1,900頭と報告されているが、その後かなり家畜頭数は増加していると考えられている。住民にとって家畜は単なる現金収入源と言うより、財産としてどんどん増やしている。しかし、現在の家畜の頭数は、明らかに自然の牧草生産能力を越えている。これは、家畜の放牧による自然植生の後退が急激に進んでいることから明らかである。住民の話では、20年くらい前まではジャバルは深い森林と草原に被われ、道を外れるとどこにいるかもわからなくなったと言う。農家、農業関係機関も過放牧の実体は十分認めているものの、適切な対応策が取られている形跡はない。ただ、森林局が一部で植生回復のための植林や、種子生産用区域保護を小規模ながら行っている。



雨期の状況 草で一面覆われている。



乾期の状況 雨季に草原だった場所でも乾期はほとんど地面が露出してしまふ

パキスタンあれこれ(3) ~ 海外出稼ぎとドバイ・シンドローム

パキスタンの人口一人当たりのGDPは400ドル強、未熟練労働者の月給は1,000~3,000ルピー(約3,000~9,000円)程度である。これと地理的要因もあいまって、物質的、金銭的な豊かさにひかれて中東の産油国への出稼ぎ希望者は後を絶たない。産油国では自国の10倍稼ぐことも可能である。また産油国側にとっても、もともと人口が少なく労働力が不足していることや、産油国のアラブ人が原油採掘現場、道路・住宅建設、農場での作業等の3K労働を嫌うこともあって需要と供給が合致している。

パキスタンと中東(アラビア半島)との位置関係を地図で確かめてみるとほんの目と鼻の先で、実際にカラチ~ドバイ(UAE)までの距離とカラチ~イスラマバード(パキスタンの首都)はほぼ同じである。宗教も同じイスラム教であり、言葉も多くのインド人、パキスタン人労働者がいることから、言語人口で言えばヒンディー語、ウルドゥ語(話言葉はほとんど同じ)が多数派であり、そういう点では日本に出稼ぎに来るよりもカルチャーショックもなく、問題は少ないと思われる(アラブ人と日本人の人の使い方を比べると、いちがいに言い切れないが.....)

最盛期は過ぎたとはいえ、出稼ぎ労働者の海外からの送金はパキスタンの経済にとってもいまだに重要である。ただ出稼ぎは豊かさをもたらす明るい面ばかりではなく、「ドバイ・シンドローム」と呼ばれる影の部分も合わせ持っている。ここでは「ドバイ」は出稼ぎ先の代表として使われている。まず出稼ぎをするためには普通、エージェントに多額の手数料を払わなければならない、借金漬けになり心理的に不安になる。次に晴れて出稼ぎに行けても、残された家族は一家の大黒柱の不在によって家庭内が荒れたり、送金によって豊かになり浪費癖がついてくる。さらに出稼ぎ者の帰国後はこうした自分の家庭の崩壊に愕然とし、自身も高額所得に慣れすぎて落差のあるパキスタン社会になかなか復帰できない.....

先日、出稼ぎ供給側のパキスタンと受入れ側の産油国UAEに相前後して短期出張したときに感じたことがある。UAEの通貨はディルハム(DH)で1DH=30円程度、一方パキスタンはルピーで1ルピー=3円程度。したがって、10DHがほぼ100ルピーに相当する。日本円に換算すれば同じ300円でも、パキスタンで100ルピーあればなかなか使い出があるが、UAEの10DHはすぐに消えてしまう。つまり物価がそれだけ違う、ということだが、出稼ぎ中に高額所得、高額消費に慣れてしまうと、出稼ぎから帰ったときにそのギャップにとまどうのでは、と思う。得たものに対して失ったものの大きさは人それぞれであろうが、いずれにしろなくしてから初めてその大切さに気づく、というのは人間の哀しい性ではある。



パキスタンの果物屋



UAEのパキスタン人労働者



地方都市の街並み



Abu Dhabiの街並み